様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２５日現在

機関番号：３０１０３
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９４０１０３１
研究課題名（和文）北アジアにおける後期旧石器時代成立過程の研究
研究課題名（英文）A study of approval process at Upper Paleolithic age in north Asia

研究代表者
鶴丸　俊明（TSURUMARU TOSHIAKI）
札幌学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：５０１８８６４５

研究成果の概要（和文）：標記の研究課題を達成するために、モンゴル国において後期旧石器時代初頭から中期旧石器時代末期に該当する可能性のある遺跡を追い求めて、広大な地域の遺跡分布調査と数遺跡の試掘を実施した。その結果、同国中北部において、明らかに両時期にまたがる時代の遺跡を確認し、最終年度に本調査を実施した。試掘時・本調査時の発掘では、中期と後期それぞれに特徴的な技術が供伴するとともに､馬の歯､げっ歯類の顎骨を含む多数の骨、大型哺乳類の骨、駝鳥の卵殻等が発見された。ただし、発掘地点は急峻な崖面を含む 3m 弱の深さを持つことから、発掘面積は限定的にならざるを得なかった。しかし、この発見は、北アジアや東アジアの後期旧石器時代の成立過程を考える上で、貴重な資料となるだろう。

研究成果の概要（英文）：To achieve the task, I have executed the distributional survey and sondage for site for three years in Mongolia. As the result, site of the transition period from Middle Paleolithic age to Upper Paleolithic age were discovered, and the site were excavated in year fourth. In the excavation, horse's teethes, rodent teethes and bones and ostrich's egg shells excavated along with stone implements such as blads, blad cores, scrapers and flakes. The results will become the valuable data in thinking about the approval process at Upper Paleolithic age in north Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
２００８年度	2,800,000	840,000	3,640,000
２００９年度	2,800,000	840,000	3,640,000
２０１０年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
総　計	12,900,000	3,870,000	16,770,000

研究分野：旧石器時代
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：旧石器、モンゴル、石器製作技術、ルバロワ技法、石刃技法、馬歯、駝鳥の卵殻

１．研究開始当初の背景

(1)　ユーラシア大陸における後期旧石器時代の成立過程は、現代型人類集団の当該域における出現・展開と直接に関係する。したがって、現代型人類集団の拡散･適応がユーラシア大陸各地でどのように進行していたのかを具体的に明らかにし、その結果を相互に比較していくことで、現在提示されている巨視的なシナリオ･仮説を検証していくことが求められている。その提示されているシナリオ・仮説とは、すなわち東アフリカに起源を持つ現代型人類集団が、一系的に最終氷期

のユーラシア各地へ拡散していったとするものである。しかし、現代型人類集団と先行する人類集団（ホモ･エレクトゥスとその系統）との間の関係、拡散過程のなかでの文化・行動的諸要素はどのように変容していったのか、という重大な問題点に関しては、いまだ未解決の部分が大きく残されている。この問題の解明には、考古学的なアプローチからの検証が早急に必要とされていたのである。

(2)上記の課題の解決は日本における旧石器時代の開始に直接的に関係する点であり、同時に本邦に中期旧石器が存在するか否かの議論を左右する重要な内容を含んでいた。

２．研究の目的

(1)モンゴル東部での当該期の遺跡の発見と発掘調査が目的であった。モンゴル国内では、ソ連、ロシアとの間で旧石器時代遺跡の共同調査が長らく実施されてきたが、それらは西部や南部においてであった。そのため東部の状況は不明であったことが理由である。

(2)また、より東方のロシア極東地域や中国東北部では、これまで当該期に関する遺跡の調査は知られていない。また日本列島に関しても、前期旧石器捏造事件の影響により、この時期の様相は殆ど不明のままとなっていることから、標記の目的へのアプローチあるいは達成の成果をこれら東方地域の問題解決の一助とすることをも目的とした。

３．研究の方法

分布調査による中期旧石器時代・後期旧石器時代遺跡の把握と試掘調査。モンゴル東部のヘンティー県において、分布調査を行い、そのうちの３遺跡の試掘を実施した。その後、調査の成果を考慮して調査地をモンゴル中北部に移して分布調査と試掘を行い、最終年度の４年目にそのうちの１遺跡の本格調査を実施した。

４．研究成果

(1)モンゴル東部では 217 遺跡を発見したがその中には明らかに旧石器時代の所産であると判断できる遺跡はなかった。その中で唯一河岸段丘上に残された新石器時代遺跡に更新世土壌の堆積を期待して発掘をおこなったが、下層からの出土はなかった。上層からは、絡条帯圧痕文と思われる縄目の文様を持つ土器片４点と石鏃、細石刃等の石器群を検出した。以上のような経過を考慮して研究代表者は、モンゴル東部において期待する石器群を恵まれた層位的条件のもとで確認することは困難であると判断し、3 年目の調査地をモンゴル中北部のエグ川流域に変更することを決断した。

モンゴル最大の河川であるセレンゲ河の支流であるエグ川流域における分布調査では、発達した河岸段丘上と砂丘上に６遺跡を確認し､そのうちの３遺跡の試掘を実施した。その結果、河岸段丘上のバヤンゴル１遺跡と命名した遺跡において、ルバロワ技法に特有の打面を持つ剥片を発見したことから、科研費最終年度の４年目に、本格発掘を実施することとした。

バヤンゴル１遺跡はレスと粘土質土壌の互層からなる厚い更新世土壌からなり、地表下 3.5mの深さに、石刃、石刃石核、削器、剥片とともに、大型哺乳動物の骨、げっ歯類の顎骨を含む各部位の骨、駝鳥の卵殻等を含む包含層を有していた。

この調査では本格発掘のきっかけとなった中期旧石器の特徴を持つ剥片および石器の出土はなかったが、期間･費用・崖に面した発掘地点であるという現場環境から発掘面積が限定的であることを考慮するまでもなく、両者が伴う可能性は極めて大きいと考えられる。

以上のように、私たちは当初の石器群の把握には成功したのである。ただし、発掘面積の小ささゆえの問題、つまり完全な石器群の把握には至っていないことは事実であり、北アジアにおける後期旧石器時代成立過程を論ずるためには、さらに補充の調査がひつようであると考える。

現在の資料整理状況は、考古学資料の整理･図化は既に終了し、動物遺存体の分析の終了を待っている段階である。その後、2011 年度中に報告書を刊行する計画である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

① Ｂ．ツォグトバートル、鶴丸俊明、安蒜政雄、高倉純、飯田茂雄、大塚宜明、モンゴル国ヘンティー県ベレフＩ遺跡に発掘調査､第 10 回北アジア調査研究報告会発表要旨集、査読無　北アジア調査研究報告会実行委員会、2009、pp.25－28,

② 飯田茂雄、大塚宜明、鶴丸俊明、Ｂ．ツォグトバートル、安蒜政雄、高倉純、モンゴル国ボルガン県ハタグホンドル郡バヤンゴルＩ遺跡の発掘調査､第 12 回北アジア調査研究報告会｣発表要旨集､査読無､北アジア調査研究報告会実行委員会、2011、pp.43 - 46、

〔招待講演記録〕（計１件）

鶴丸俊明、なぜモンゴルか？―北海道旧石器文化の位置を探る―、日本･モンゴル考古学共同調査学術講演会・写真展記録集、同実行委員会・モンゴル科学アカデミー考古学研究所･在モンゴル日本国大使館､2011､pp. 43-50、

（モンゴル語・日本語対訳）

〔シンポジュウム記録〕（計１件）
鶴丸俊明　2009　「エグ川・セレンゲ河の旧石器時代」『草原の文化―モンゴル高原の考古学』札幌学院大学Booklet No.2,

６．研究組織
(1)研究代表者
鶴丸　俊明（TSURUMARU TOSHIAKI）
札幌学院大学･人文学部・教授
研究者番号：５０１８８６４５

(2)連携研究者
安蒜　政雄（ANBIRU MASAO）
明治大学・文学部・教授
研究者番号：００１８３１５３

連携研究者
高倉　純（TAKAKURA JUN）
北海道大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：３０３４４５３４